



(倉吉)

鳥取・大御堂廃寺

おおみどう

本格的な寺院であり、川原寺式軒瓦の他、埴仏・塑像・佐波理匙・仮具の鋳型などが出土している。出土墨書土器によると、郡名を負う「久米寺」と考えられる。

1 所在地 鳥取県倉吉市駄経寺町上湯原
2 調査期間 一九九六年（平8）一一月
3 発掘機関 倉吉市教育委員会

4 調査担当者 森下哲哉・根鈴智津子・岡平拓也

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 七世紀後半～平安時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大御堂廃寺は鳥取県中央部を日本海へ北流する天神川とその支流小鴨川に挟まれた、西方に打吹山を望む標高一六mの沖積平野に立

地する。ほぼ真西に伯耆国

府が位置することから、大御堂廃寺の南には国府へ続く古代の官道山陰道の存在

が推定されている。

寺域は東西約一七〇m、

南北はそれ以上と推測され、

伽藍配置は觀世音寺式の可能性がある。山陰最古級の

木樋を設置した際に下にかませてあつた軒丸瓦や掘形内の土器は七世紀末～八世紀初に比定されるが、材の伐採時期は年輪年代の測定結果から五九六年以降と特定された。削り落とされた辺材（白木）部分の年代を加算すると六六〇年頃の年代が推定でき、寺院創建段階から木樋の設置が計画されていたと考えられる。

寺域東限付近の溝SDO一から墨書土器が約一六〇点出土している。主なものに、郡名寺院を示す「久米寺」とその省略の「久寺」、吉祥字「吉」「福」の他、「淨私」「淨」「東」「印」などがある。

8 木簡の釈文・内容

(木樋No. 1)	「」	1961
(木樋No. 2)	「」	1961
(木樋No. 3)	「」	1961
(木樋No. 4)	「」	1961
(木樋No. 5)	「」	1961
(木樋No. 6)	「」	1961
(木樋No. 7)	「卯」	1960
(木樋No. 8)	「巳」	1960
(木樋No. 9)	「」	1960
(木樋No. 10)	「」	1960
(木樋No. 11)	「」	1960
(木樋No. 12)	「」	1960

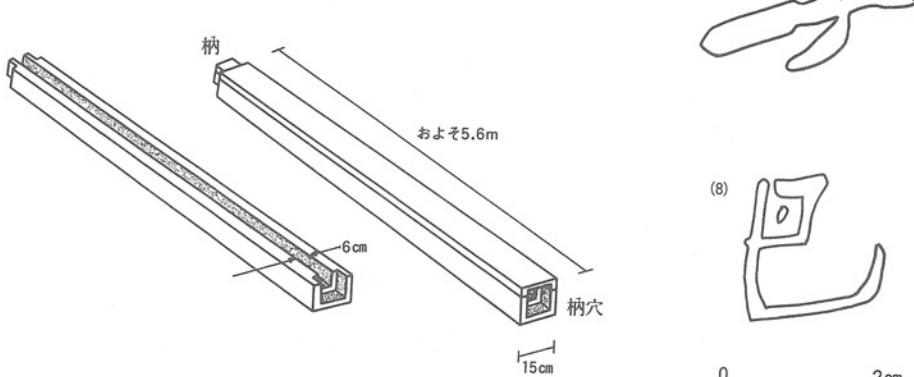
一辺約一五cmの杉の角材（二方柾）を縦に裂き割つて蓋と身に分け、両端に継手を作りつけて導水部分を削り抜いている。一端に柄穴を、もう一端に突起を作る追廻継で、接合順を変えることはできない。一本の長さはばらつきがあるが約五・六mで、保存状態は非常に良好である。

墨書は一二本中六本の柄穴側の右肩隅部に、番付様の符号が一字ずつ、蓋上面に三カ所、身側面に五カ所、計八カ所観察された。蓋と身を合わせるための印か、木樋を連ねる順序を示すものであろう。

9 関係文献

倉吉市教育委員会「鳥取県倉吉市大御堂廢寺」（日本考古学年報）四九
（根鈴智津子）
一九九八年）

木樋形状模式図



墨書部分模式図

